妄想する

訳ありの人々が偶々寄せ集められてしまう場所というものがある。
今から数十年前、そのような性質を持つアパートに住んだことがあった。親元からはじめて離れようとする自分と、仕事がまだ見付けられずにいた恋人と、都心から一時間ほど離れた、とある駅近くの不動産屋を回り、ふたりの都合に悪すぎない物件から、地域で最も安いアパートに決めた。わたしたちには経済的事情が「訳あり」であったために、他の選択肢はなかった。
そのアパートには一階と二階に三室ずつ計六室あり、各部屋は全て同一の作りで六畳と四畳半の寝室にキッチンと風呂、トイレが付いていた。
室内には廊下がなく、玄関扉を開ければそこはすでにキッチンで、すぐ右手に風呂場があり、トイレのドア、二つの寝室へのそれぞれの襖、それら全てが狭い玄関から見渡せていた。一階の部屋には掃き出し窓に縁側が続き、隣との敷居までのちょっとした露地があった。二階のベランダは無愛想な鉄製の手摺に囲まれていた。
ふたりの条件というのは、それぞれのプライベート空間を持つということだったので、寝室を分け、互いの部屋を通らずに諸々済ませられるということがこのアパートの唯一の利点だと言えた。
その時は一階に二部屋、二階に一部屋空いていて、多少の日当りの良さから二階の真ん中の部屋、二〇二号室を選んだ。
隣の二〇一号室には、五十歳前後の男性が独りで暮らしていた。
数日間出掛けて帰らない時もあって、そんなある日、その男の行方を尋ねる二人組がやって来た。
見るからにテレビドラマのその役柄にしつらえられた様な風貌の二人で、こちらが「知りません」と手短かに答えると、去り際に「借金返せ」「至急連絡しろ」の張り紙を隣人の扉に残して行った。数日すると何事もなかったかのようにその住人は戻っていた。反対隣の二〇三号室には四十代くらいの女性が一人暮らしをしていた。
夕方から働きに出ていたようだが、良く気がまわる性格で、共用部の電燈が切れたり下水の詰まりだったり、はたまたシロアリ発生の疑いなどを見つけては率先して管理会社に連絡するのが日中のその女性の役目だった。そのほか二階の共用廊下には、誰かに餌付けられた野良猫も出入りしていて、各部屋の玄関脇に置かれていたそれぞれの洗濯機の上に気まぐれに日ごと場所を変え陣取っていた。

一階の一〇一号室には夫婦と娘ひとりの家族がいた。就学前のその娘は癇癪持ちのようで、その尋常でない泣き叫び様に一時は児童虐待を疑ったほどだった。
真下の一〇二号室とその隣の一〇三号室は空き室だった。ある日、自室のベランダから不意に階下に目をやると、空き室になっているはずのその部屋の縁側に、口を開けたままの段ボール箱に入れられた猫の死骸があった。だが次の日には、相変わらず口を開けたままの段ボール箱はそのままに、猫の死骸だけが忽然と消えていた。頭上ではいつものように米軍の戦闘機が轟音を立てて行き交っていた。
しばらくしてその部屋には新しい住人が入った。

一〇二号室には三十代前後の男女のカップルが入居した。
女の方は声が時折聞こえてくるくらいで姿を見せることはほとんどない。男の方といえば日中は出掛けていないのか、玄関先で煙草を吸っているところを見かける。同居人も稀にその男とでくわすことがあるらしいが、目が合っても絶対に男の方から挨拶をすることがないと言う。ふたりの間では、そんな男に対して「冴えない男／無愛想な男」と評価を下していた。また、個人的な見解では男は酒乱である。それも相当に悪質だ。安アパートの薄い壁と床板を響かせて、ヒステリックにドアを閉めたり、投げ付けられるような音が階下から聞こえてくる夜が週に一、二回もある。
ある夜、煙草を吸おうとベランダに出た時、その男も煙草を吸おうとしたのだろう、大変な酩酊状態でわたしの真下に現われ、縁側を踏み外し落ちる場面を目撃したこともあった。男は酒を飲み出すと、前半は上機嫌に女と語らっている様子だが、次第にそれは罵声へと変わっていった。夜中に突然の怒鳴り声と物音で眼を覚まさせられることもしばしばあったので、早くこのアパートから出ていってほしい、と心から願っていた。
また別の夜の階下の騒音は一段と凄まじかった。その振動のせいで、サイドテーブルに置かれていた肉感的で不安定な壺が倒れて床に転がり落ちていた。男の声に混じり、それまではほとんど聞こえたことのなかった女の罵声、嗚咽の混じった泣き声、ヒステリックな悲鳴が重なっていた。
その時はどちらかといえば、男の方が「まあ、まあ」となだめている風であったようにも感じられた。
一階の一〇一号室には夫婦と娘ひとりの家族がいた。就学前のその娘は癇癪持ちのようで、その尋常でない泣き叫び様に一時は児童虐待を疑ったほどだった。
真下の一〇二号室とその隣の一〇三号室は空き室だった。ある日、自室のベランダから不意に階下に目をやると、空き室になっているはずのその部屋の縁側に、口を開けたままの段ボール箱に入れられた猫の死骸があった。だが次の日には、相変わらず口を開けたままの段ボール箱はそのままに、猫の死骸だけが忽然と消えていた。頭上ではいつものように米軍の戦闘機が轟音を立てて行き交っていた。
しばらくしてその部屋には新しい住人が入った。

一〇二号室には三十代前後の男女のカップルが入居した。
女の方は声が時折聞こえてくるくらいで姿を見せることはほとんどない。男の方といえば日中は出掛けていないのか、玄関先で煙草を吸っているところを見かける。同居人も稀にその男とでくわすことがあるらしいが、目が合っても絶対に男の方から挨拶をすることがないと言う。ふたりの間では、そんな男に対して「冴えない男／無愛想な男」と評価を下していた。また、個人的な見解では男は酒乱である。それも相当に悪質だ。安アパートの薄い壁と床板を響かせて、ヒステリックにドアを閉めたり、投げ付けられるような音が階下から聞こえてくる夜が週に一、二回もある。
ある夜、煙草を吸おうとベランダに出た時、その男も煙草を吸おうとしたのだろう、大変な酩酊状態でわたしの真下に現われ、縁側を踏み外し落ちる場面を目撃したこともあった。男は酒を飲み出すと、前半は上機嫌に女と語らっている様子だが、次第にそれは罵声へと変わっていった。夜中に突然の怒鳴り声と物音で眼を覚まさせられることもしばしばあったので、早くこのアパートから出ていってほしい、と心から願っていた。
また別の夜の階下の騒音は一段と凄まじかった。その振動のせいで、サイドテーブルに置かれていた肉感的で不安定な壺が倒れて床に転がり落ちていた。男の声に混じり、それまではほとんど聞こえたことのなかった女の罵声、嗚咽の混じった泣き声、ヒステリックな悲鳴が重なっていた。
その時はどちらかといえば、男の方が「まあ、まあ」となだめている風であったようにも感じられた。
意外にも大した感触はなく、元の鞘に収まるようにそれはすんなりと入った。その瞬間、男を苛立たせていた高く大きく響く音は止み、男が透かさずナイフを引き抜くと、それは陶酔しきった指揮者のように両手で空に二、三回円を描きながら後ろへ倒れた。その轟音は改めて人の体の重さを感じさせるものだったが、男には聞こえなかった。ただ、その場を凌いだ達成感に男は満足していた。
ヒサエを台所に置いたまま、自分の部屋へ戻り数時間眠った。
男は拝島駅発の始発電車の出る十八分前に眼を覚まし、蛍光灯の青い光に照らされ続け色を失った台所を通って、それを跨いで出ていった――

× × × × × × × × × × × × ×

トモ夫は、別れた恋人と棲んでいた部屋へ戻ってきた。
二人で暮らすために借りたアパートに独りで住んでいたくはなかったので、引っ越しを決意したのだ。両親のいる実家にこの数日間は帰っていたが、やはり一人暮らしはいろいろと面倒なので、実家に戻ることにした。ここへ越して来た時は彼女と二人で少しずつ生活必需品を揃えていったが、彼女は何も持たずに出て行ってしまった。トモ夫はアパート契約時に支払った敷金を、できる限り多く取り戻したかったので、片付けや特に掃除は念入りにしておきたかった。今日は大変な作業が待っていることを分かっていたので、もう少し早く来るつもりでいたのだが、出掛ける前にだらだらと過ごさないと家を出る気になれない。
結局、アパートへ着いたのは夜七時過ぎだった。
先ずはじめに一番汚れの酷い台所から取り掛かることを想像した。そこさえ片付けば後は簡単だろうとトモ夫は思った。
こもった部屋の臭気を予想し、息を止めて部屋のドアを開け玄関に入った。恐る恐る臭いを嗅いでみたが、さほど臭わない。きっとこの寒さのお陰だろう。暖房ももちろん消していたし、壁の薄い安アパートの一階の部屋では、この一週間、気温が五度以上に達した時間帯はほんの僅かであったに違いない。
先に大きな物を片付けてしまおうと思っていたが、手が汚れてしまう前に一服したくなった。トモ夫は妙なところに神経質で、部屋に臭いが付くことを嫌い、室内では煙草を吸わなかった。しかし、この時は玄関横の風呂場で一服することにした。外にわざわざ出るのは面倒だったし、金輪際この部屋で暮らすことはないのだから部屋で煙草を吸わない理由もない。

× × × × × × × × × × × × ×

今ではもうそのカップルの顔を思い出せない。だが、その時の仄暗い蛍光灯の青い光は蘇り、血の臭いも嗅ぐことができてしまう。
最初に転がっている壺を運ぶことにした。まだ十分に重い壺のびれの部分を持ってずるずると引きずり、ひとまず風呂場に置いておく。
いよいよ台所中の拭き掃除である。トモ夫は雑巾を持参し忘れたことに気が付いた。タオルは持って来ていたが、後で何かに使うかもしれないので残しておきたい。奥の四畳半の部屋に入り、押し入れの中の引出しから雑巾替わりに調度良さそうな、別れた彼女のTシャツやトレーナーを掻き集めた。
空気がとても乾燥していたせいか、壺の真下にあった血溜まり以外はほとんど乾いて、瘡蓋のようになっていたり、染みの様になっていたりする。瘡蓋状にこびり付いた固まりはスプーンで簡単に刮げ落とすことができたが、壁に付いた染みは雑巾で何度も拭き取らなければならなかった。血液は一度乾いても、水分を与えて擦ると染みの範囲を拡げてしまうので、常に汚れていない雑巾に取り替えなければならなかった。一通り拭き終わったと思っても、意外な場所にまで飛沫は及んでいるので、最後には血痕が意思を持ってどこかに隠れているのではなかろうかと、疑心暗鬼に陥る程であった。息があがり、ついつい鼻で呼吸をすると血の臭いが追い出されたのか、その夜を境に二人の気配が階下から薄れた。
そして男の酒癖にうんざりした女が出て行ったのか、あるいは男それから幾日かが過ぎた頃だろうか、同居人が部屋の中の異臭を訴えた。
彼が言うには、それは歯科医院に訪れた時のそれと似ているらしく、強烈な消毒薬のようなその臭いは狭いキッチンに充満していた。いろいろと考えても臭いの発生源には思い当たらなかった。こんな寒い日の夜遅くにどこか近くで大量の消毒薬が撒かれているのだろうか…

× × × × × × × × × × × × ×

ある晩、アパートの一室。
冴えない男とその恋人がいつもの様に晩酌をしている。そして、いつものように男が暴れはじめる。
長い間、耐え続けていたヒサエの堪忍袋の緒が終に切れた。
音無しく、質素で慎ましやかな女であった。男のつまらない冗談に朗らかな笑みをたたえ、下らない愚痴には母のように黙って頷き受け止めていた。だが、とうとう堪えられなくなったのだ。
涙がぽたりと落ちたのを皮切りに、両手のふくよかな拳がちゃぶ台の上でぽんぽんと跳ねた。その愛らしい光景とは逆に、ちゃぶ台は繰り返される打撃に悲鳴を上げている。醤油の小瓶が倒れ、キュウリの漬け物や柿の種が無抵抗な市民への空爆の後のように無秩序に転がり、その屍骸たちはなす術もなく、その振動に同調した。
ヒサエは泣き叫びながら男以上に暴れ、罵り、そして別れを告げた。男の酔いも醒める勢いで、どんなになだめてもヒサエの興奮は治まらず、その修羅場の中で男は遂方に暮れていた。ヒサエの声は、徐々に意味を失い悪意の篭った叫び声だけとなり、男にはその時のヒサエが狂った機械の様に見えた。それが発する邪悪な音波に侵され思考が停止する。脳内に立ちこめる煙が一切の隙間を覆い尽くしてしまう寸前に男は閃いた。
一瞬の静寂の間、その隙に男はひらりと台所へ向かった。
背後から忌まわしい機械が付いて来ていることは察していた。男は振り返り、罵声の根源へ、再び唸りだした機械の、その楽器のように震わせている喉元へナイフを一気に突き刺した――

二〇〇六年に東京都福生市の自宅「栄荘」にて起筆。二〇〇九年「恋ケ窪オープンスタジオ」のために発表。二〇一二年九月にループホール（東京）で開かれた個展「妄想する」のために改訂版を出版。今回、グループ展「イタリアの三日月」（アズマテイ・プロジェクト、神奈川）出品のために再改訂した。

謝辞―　原 満陽子氏（ループホール）

大久保 あり

／「妄想する」
二〇二十一年二月